

## 『欲望という名の電車』

— ブランチと南部 —

吉 成 怜 子

〔抄 録〕

『欲望という名の電車』(A Streetcar Named Desire, 1947)は、いうまでもなくテネシー・ウィリアムズ(Tennessee Williams, 1911-83)の代表作である。ヒロインであるブランチ(Blanche)について彼は、「ブランチはわたしだ」<sup>(1)</sup>と自らが語ったように、さながらブランチを彷彿とさせるようなアルコール中毒、男性遍歴などの諸行は、決して社会に受け入れられそうもなかった。ウィリアムズが演劇界の巨人でありながら、異端者として生きてなお、彼が究極的に求め続けたものは、アメリカ南部に生まれた繊細で優雅な心情への愛着だった。われわれ現代人は経済的發展を追い求めるあまり、ともすれば他者への優しさや思いやりなどをないがしろにしてきた。その憂いをブランチのたった一人の戦いとして、ウィリアムズはこの作品を執筆したともいえる。そのブランチの負け戦だと知りながら戦う姿を本論では検証してゆきたい。

キーワード ブランチ、アメリカ南部

### はじめに

文学作品を分析する上で、背景となる時代、社会環境を知った上で、作家自身の問題意識を探究することは、重要な要素だと考える。それを考慮するとき、本作品はアメリカ南部という背景をぬきにしては、成立しえない作品である。とくに、ヒロインのブランチは南部美人そのものであり、アメリカ南部の象徴そのものだといっても過言ではない。

アメリカ南部、それはアメリカでもっとも古い地域に属する誇り高い地域である。<sup>(2)</sup>ジョージア州、アラバマ州、ミシシッピ州、ルイジアナ州などは黒人奴隷の労働力によって支えられて、綿花栽培で財をなした一握りの白人だけが貴族的社会を築いてきた。それは、南部が植民地として第一歩を踏んで以来、農業を中心としたヨーロッパ中世の封建社会のような構造をなしていた。前述の一握りの白人プランターを頂点として、次に少数の黒人奴隷を有する自営農民、最下層にプア・ホワイトと呼ばれる農民というヒエラルキーで構成されていた。それだけに古い因習や文化が、他のアメリカの地域とは違った形で生き続けてきた地域でもある。南部の歴史は、北部や西部の経済的發展や成功、進歩などとは反対に、貧困、敗北、後退といっ

た常に陽の当たらない道を歩んできた。それらの歴史的な経験によって、南部社会は異質な性格をもった地域として、アメリカの中の外国といわれるような、独特の雰囲気をかもしだしている。暴力、人種差別といった言葉に代表される南部は、「アメリカの恥」とさえ言われ続けてきた。この作品の舞台となっているニューオーリアンズは、ルイジアナ州南東部にある大都市で、特に南部でも「深南部」と呼ばれる南部色の濃い地域である。しかし、この作品のニューオーリアンズのフレンチ・クォーターのエキゾチックな古い町並みや、現代離れのしたゆったりとした生活のテンポから、そういった南部の姿は想像しがたい。ウィリアムズは、そんな南部の印象を次の場景から垣間見ることができる。

*You can almost feel the warm breath of the brown river beyond the river warehouse with their faint redolences of bananas and coffee.*<sup>(3)</sup>

作者が若いころ幾度も住居を転々としながらも、なお愛してやまなかったニューオーリアンズこそ、ウィリアムズの創作の息吹がほとばしる場所である。それは、白人も黒人もヒスパニック系住民も奇妙に融和し、地域に生き生きと生活を営んでいる様子から、他の地域と異なった趣のある町と、作品のなかで描写している。

*Two women, one white and one colored, are taking the air on the steps of the building. The white woman is Eunice, who occupies the upstairs flat; the colored woman a neighbor, for New Orleans is a cosmopolitan city where there is a relatively warm and easy intermingling of races in the old part of town.*<sup>(4)</sup>

ニューオーリアンズはウィリアムズが同性愛者として生きることを排斥されたり、干渉されることがなかった町だったのではあるまいか。それに対して、本作品のなかでユーニス (Eunice) の言葉からも語られているように、ミシシッピ州の「白い円柱のあるお屋敷」<sup>(5)</sup>がブランチとステラ (Stella) 姉妹の生をうけた場所であった。それこそ、黒人奴隷の労働力の汗の賜物だといわんばかりの生家の描写である。宗教色濃い地域でありながら黒人を排斥し、白人優越主義を押し通してきたのが南部である。ウィリアムズ自身幼少の頃、祖父の牧師館にいた黒人女性のメイドに親しみを感じていたことから、純然たる白人社会よりもニューオーリアンズの人種混交した社会に居心地のよさを感じていたのだろう。とはいえ、親しみやすさや、住みやすさといった陽の部分ばかりをこの作品では描いてはいない。陰の部分である南部社会に潜む暴力を、ウィリアムズはつねに感じていたにちがいない。この作品から後に発表した、『地獄のオルフェス』(Orpheus Descending, 1957) では、暴力を鋭く描いている。そこでは、主人公であるヴァル (Val) が、深南部の雑貨店の女主人マイラ (Myra) と結ばれるが、そのため彼女は

夫に射殺され、ヴァルもその町の人々の火刑のリンチを受け、殺されてしまう。

ウィリアムズの著作以外に、過去に存在した暴力や人種差別問題を扱った小説や映画、あるいは新聞、テレビの報道などで南部は、決して良い印象をわれわれに与えていないのも事実である。

しかしながら、南部社会には、‘Southern Hospitality’といわれる他人に対する親切や思いやり、気配りなどは、アメリカ人が遠い昔に地域社会が大切に育んできた美德であり、それをそのまま継承してきたのが南部である。この劇のヒロインであるブランチもまた、南部社会で培った美德であるそれらを身に着けた淑女の一人である。ともあれ、良きにつけ、悪しきにつけ、南部は、アメリカの他の州とは異なる特色をもった地域であるといえる。

## 1. ステラとの確執

「白い円柱のあるお屋敷」に育ったブランチは、土地を食い潰した一族の乱行三昧の後始末と、その後の一族の死者の葬儀を一人でこなしてきた。その頃にはすでに妹ステラは家を出てスタンリー (Stanley) と結婚していた。自立できそうもないブランチが頼りにしたい妹さえそばで支えてくれない。ステラが家を見捨てたとなじるブランチだが、しかし、ベル・リーブ (Belle Reve) の邸宅をステラのように捨てることができない。それは、滅びゆく南部上流階級にすがって生きることが、彼女には心地よかった。他者に接するときのやさしさや、気遣う気持ちや大切にしている心、それは人を傷つけることもなかった。しかし心地よさは同時に、現実の厳しい世界に放り出されると、強く生きてはいけない。そんな人間同士の暖かい環境それは過去の遺産となってしまっても、彼女は古きよき時代を夢みたいと思う。人間のやさしさで包まれた環境の中でのみ、彼女の精神の均衡は保たれていたのかもしれない。しかし、その場所さえブランチには終のすみかではない。ベル・リーブを去らねばならないブランチは、依存する他者を求めたり、飲酒でわずかに精神の均衡を保とうとする。元来他者と適応する能力に劣るブランチには、ステラがあっさりとして上流階級を捨てたことをなじる一方で、自己の適応性のなさを責めている。

ステラはブランチにとって、自分に持ち合わせていない適応力のある一人の女性として、ライバル視している。同じ家庭に育ち、自分にはない決断力と社会への適応力をもつステラは、ブランチには到底味方と思えない。

ステラとブランチの性格の相違は、顕著に現れている。ステラは堅実であり、ブランチは過去の栄華を忘れることができない。ブランチとステラの姉妹は性格の相違だけでなく、結婚相手の選択にも対照をなす。ブランチは秀才で、文学を愛する繊細な美少年のアランを夫として選び、他方のステラは粗野で教養のない動物的なスタンリーを選んだ。ブランチにとって、自分の理想像であったアランが同性愛者であり、夫婦間の肉体的満足感は味わえなかった。他方

のステラは、動物的なスタンリーとの肉体的結合によって、現実の貧乏生活を忘れるほど充実した生活を送っている。ブランチが表面的に性を嫌悪する様子にステラは、男女の精神的な結合とは別の、肉体的な結びつきの重要性を説く。

ステラにとってベル・リーブにいた頃のブランチの不幸な結婚生活を思いやって、ステラなりの同情心を持ってブランチにいう。

STELLA: But there are things that happen between a man and woman in the dark—that sort of make everything else seem—unimportant.<sup>(6)</sup>

ブランチには、さまざまな男性との娼婦まがいの生活を隠していたいために、またブランチにとっては、それは第二のアランを探しているのだと自分自身にも嘘をつき、ステラにも嘘をつくためにもステラの言った「暗闇」の行為を肯定できない。それに加えて、ブランチは南部上流社会の道徳観や因習を引きずって、どうしてもステラのように人間の性の本能を肯定することができない。そしてステラがそれらもろもろ束縛を逃れて、自由な性を謳歌していることに苛立ちを覚える。

BLANCHE: On the contrary, I saw him at his best! What such a man has to offer is animal force and he gave a wonderful exhibition of that! But the only way to live with such a man is to—go to bed with him! And that's your job—not mine!<sup>(7)</sup>

そして、ステラはスタンリーとの決して豊かではない生活に満足し、おまけに彼の暴力的な行為にも、弁解をして彼を弁護する。

スタンリーの人間性を自分と一緒に罵倒すると思ったステラが、彼を擁護する立場にいると悟ったことは、ブランチの戦いがすでに敗北の兆しを呈している。そして、ステラをむしろ、相反する側にたつ人間と見なしている。同じように南部の貴族的社会で育った二人であるにもかかわらず一人残った妹さえ、別の世界の人間だと感じる心情は、他人に対するそれより、なおさら強く感じる。

STELLA: He smashed all the light bulbs with the heel of my slipper!

[*She laughs.*]

BLANCHE: And you - you let him? Didn't run, didn't scream?

STELLA: I was - sort of - thrilled by it. [*She waits for moments*]

Eunice and you had breakfast?<sup>(8)</sup>

ステラとスタンリーとの荒々しく、野卑にみえる夫婦関係も、二人にとっては十二分に人生を謳歌していることになる。ランチがかつて一度も経験したことのない肉体と精神の満たされた悦びを、スタンリーとステラ夫婦が具現している。それを感じながらも、夫婦のしっかりと結ばれている絆の強さを、ただ夫婦間の肉体だけの欲望のみで結ばれていると理解するランチには、女としての悲哀が感じられる。結局ランチは、精神と肉体の合一を探しながら、どこにも見つけることはできなかったことになる。

## 2. ブランチの内面

人間だれしも、二面性を内に持ち合わせているであろう。ランチの二面性は、「純真さとしたたかさ」、「繊細さと非常さ」、「艶やかさと醜さ」、「教養深さと不道徳」などを併せ持つ。ランチはその陽の部分に憧憬の念を抱きながらも、陰の部分に敗北を喫する。ランチ自身はその内面の葛藤によって苦悩するとき、陰の部分了他者からつきつけられると、それを否定する心情と肯定しなければならない心情の間で、だれからも救いの手が差し出されないことに寂しさがつのる。そして自分以外に解決できない内面の問題を、他者に援助をもとめて解決しようとしてもできそうもない。しかし人には現実から逃避してその孤立感を解決しようとしても、そこにはなんらかの歪みが生じる。それこそランチが精神を病んではじめてその苦悩は消えるという皮肉な結末となる。われわれがランチに深い哀情を抱くことができるのは、だれもがランチの中に自分たちの分身を発見したときに共有するあの感情であろう。

ランチが抱えていた苦悩、それはリビドーというよりもっと広い愛情の欲求が満たされないことによる苦悩がその根底にある。そして愛情の欲求と同時に、真の自身の特性を認めてくれる男性を捜しあぐねて、娼婦まがいのすさんだ生活を送ることになるが、そこでのランチは、肉体の欲望を抑制することができない。その性的欲求の基底にあるのは、孤立する不安を避け、他者と一体感をえようとする欲求が大きく作用する。

BLANCHE: Yes, a big spider! That's where I brought my victims.

[*She pours herself another drink*] Yes, I had many intimates with strangers was all I seemed able to fill my empty heart with ... I think it was panic, just panic, that drove me from one to another, hunting for some protection—here and there, in the most—unlikely places—even, at last, in a seventeen year-old boy but—somebody wrote the superintendent about it— “This woman is morally unfit for her position!”<sup>(9)</sup>

しかし、ランチは精神の高邁さを説きながら、一方で肉の欲望に溺れる自分を隠すために虚言を吐く。それが暴かれるのを恐れて、また虚言を繰り返す。それがますます孤立するブラ

ンチを生み出してゆく。そして、自身の素性を出せないもどかしさは、人間同士の触れあいの中で、つねに距離をおき、バリアを張って生きなければならない。それを飲酒によって慰めている。しかし、それは一時的なものにすぎない。そして、ブランチの精神は狂気へと変貌してゆく。それは、彼女の生きる社会の中でいかなる人間とも一体になれなかったという孤立感がその一因であったことは否めない。

南部というブランチが育った環境は、彼女の生き方に大きな影響を及ぼしている。すなわち、南部の大富豪の貴族的な社会育ちのブランチには醜悪な社会を甘受できない。それは、彼女の美德として他人への親切やおもいやり、気配りなどを備え、そして他人からはそれらの行為を当然と受けとめてきた環境にいた。また悲劇的転落以前の、特権的な社会の人々と接してきたやり方を、変えようとしないうち、また変えられない。その姿にブランチの深い苦悩がみられる。ブランチは、ノスタルジックに古き良き時代を懐かしみ、また優雅さを具えた女性であると同時に、南部社会で培った立ち居ふるまいや習慣を変えようとしないうち頑迷さ、それがブランチを「時代に生きられない女」にしてしまった。

妹ステラはむしろそういった保守的な、地域社会の中で身をおくより、自由な世界で生きたいという気持ちから、特権階級の生活を放棄した。たった一人の肉親ステラとの溝によって、ますますブランチを異質な人間につくりあげる。ブランチは登場する最初の場面からすでに、周囲と溶け込めない姿で登場する。

*[She continues to laugh. Blanche comes around the corner, carrying a valise. She look at a slip of paper, then at the building, then again at the slip and again at the building. Her expression is one of shocked disbelief. Her appearance is incongruous to this setting. She is daintily dressed in a white suite with a fluffy bodice, necklace and earrings of pearl, white gloves and hat, looking as if she were arriving at a summer tea or cocktail party in the garden district. She is about five years older than Stella. Her delicate beauty must avoid a strong light. There is something about her certain manner, as well as her white cloths, that suggests a moth.]*<sup>(10)</sup>

そして、今なお南部上流階級の誇りを持って、ニュー・オーリアンズにやってくる。次の台詞は、それを物語る。

BLANCHE: You hear me? I said stand up! *[Stella complies reluctantly]* You messy child, you, you've spilt something on that pretty white lace collar! About your hair—you ought to have it cut in a feather bob with your dainty features. Stella, you have a

maid, don't you?

STELLA: No. With only two rooms it's—

BLANCHE: What two rooms, did you say?

STELLA: This one and — [*She is embarrassed.*]

BLANCHE: The other one? [*She laughs sharply. There is an embarrassed silence*] <sup>(11)</sup>

ステラは、貧乏な暮らしも恥じようとはしない。それよりも、ブランチの過去の栄光にすぎた生き方を諭す。

STELLA: Haven't you ever ridden on that streetcar?

BLANCHE: It brought me here.—Where I'm not wanted and where I'm ashamed to be...

STELLA: Then don't you think your superior attitude is a bit out of place? <sup>(12)</sup>

そして、ステラはブランチにそのように言っても、彼女を肉親の情愛でスタンリーにやさしい言葉をブランチにかけてやるようにと、スタンリーに懇願する。

STELLA: And admire her dress and tell her she's looking wonderful. That's important with Blanche. Her little weakness! <sup>(13)</sup>

そして、さらにブランチの悪行が露見すると、ステラはブランチをかばう。

STELLA: She is. She was. You didn't know Blanche as a girl. Nobody, nobody, was tender trusting as she was. But people like you abused her, and forced her to change. <sup>(14)</sup>

ブランチは、アメリカ南部という因習的道德を生活信条とする保守的な環境の中にあって、しかも特権階級の中で教育を受けて育った一人であった。その重荷をブランチは取り去れない。一族の死によって、自由になったにもかかわらずブランチは「家」を背負って生きようとした。ブランチにとってステラを頼ってニューオーリアンズにやってくるという苦渋の決断は、南部の特権階級で生を受けたブランチにとって、ブルジョワジーの中で、成功できなかった落伍者だと自ら認めることであった。ブランチが、アメリカ南部社会で信じてきた思いやりとか洗練された優雅さなどの価値観が時代遅れとなってゆく不安は、アメリカの中でも異質な社会で生きてきた者の宿命でもあろう。

### 3. スタンリーとの戦い

スタンリーとブランチの対立は、この劇の核をなすものである。すなわち、虚偽と真実、自然と文明、肉体と精神など、劇的手法の一つであるコントラストがこれほどまで秀逸に描かれている劇は他に類をみない。

ウィリアムズのシンボリズムは、この二人の対比を鮮やかにする。スタンリーは色鮮やかな原色のシャツを着ている。それに対してブランチはそのフランス語の名前の通り、白いドレスで登場する。服装だけではない。ブランチは美しさを保つためと気持ちを鎮めるためにいつも湯船につかっている。反対に、スタンリーは汗まみれである。そこには、まるで南部社会の優雅で貴族的階級の人間と、北部社会の工業化社会の人間の対比が描かれているようである。そして、ブランチはスタンリーの家の厄介者でありながらのんびりと湯船につかって歌を歌っている。そんなブランチにスタンリーは苛立つ。そんな様子は、次の場面で描かれている。

[*Blanche is singing in the bathroom a saccharine popular ballad which is used contrapuntally with Stanley's speech.*]

STELLA: [*to Stanley*] Lower you voice!

STANLEY: Some canary bird, huh! <sup>(15)</sup>

現実の世界で荒々しく生きるスタンリーに対して、精神の尊さを説くブランチとは、最初からその対立の構図はできあがっていた。ブランチのつぎの台詞から、心の美しさ、魂の豊かさ、情の濃やかさというブランチ像がうかがえる。

BLANCHE: ... A cultivated woman, a woman of intelligence and breeding, can enrich a man's life-immeasurably! I have those things to offer, and this doesn't take them away. Physical beauty is passing. A transitory possession. But beauty of the mind and richness of the spirit and tenderness of the heart - and I have all if those things - aren't taken away, but grow! Increase with the years!.. <sup>(16)</sup>

他方で、スタンリーの台詞では、彼の現実的な面を如実に表す。

STANLEY: There is such a thing in this state of Louisiana as the Napoleonic code, according to which whatever belongs to my wife is also mine - and vice versa. <sup>(17)</sup>

ブランチは野卑なスタンリーを憎みながらも、その魅力にいつかは屈すると感じている。ス



スタンリーもそれを最初から感じていた。しかし、ブランチにとっては、男と女の駆け引きの相手としては手強い相手であった。幾人もの女性を魅了してきたスタンリーには、ブランチの虚偽を見抜く技も、ブランチの下心も見通していた。ブランチは自分自身の価値観をこのニューオーリアンズの下町にも持ち込もうとする。そして、野卑なスタンリーに自分のいた世界の優雅さを説く。ブランチは、崩壊した南部社会をなおも引きずる。スタンリーはむしろ、ステラを壮大な邸宅に住むプランターの生活から引き摺り下ろしたことに満足している。対立する二人に接点はない。スタンリーは、ステラとの肉体も精神も満ち足りた生活に侵入してきたブランチを許すことはできない。スタンリーにとっては、女性は生活の一部であり、これまで自分の魅力に屈しない女性は言葉の暴力で痛めつけてきたのであろうし、また自分の魅力に屈しない女性はこの世に存在しないという自負をもって生きてきたのであろう。

ウィリアムズはスタンリーを下記のように描写する。

[...He is of medium height, about five feet eight or nine, and strongly, compactly built. Animal joy in his being is implicit in all his movements and attitude. Since earliest manhood the center of his life has been pleasure with women, the giving and taking of it, not with weak indulgence, dependently, but with the power and pride of a richly feathered male bird among hens. Branching out from this complete and satisfying center are all the auxiliary channels of his life, such as his heartiness with men, his appreciation of rough humor, his love of good drink and food and games, his car, his radio, everything that in his, that bears his emblem of the gaudy seed-bearer. He sizes women up at a glance, with sexual classifications, crude images flashing into his mind and determining the way he smiles at them.]<sup>(18)</sup>

しかし、ブランチも幾人もの男性を翻弄してきた強かさからすると、スタンリーからブランチに甘い言葉をささやいてくれると感じていたことだろう。しかし、この男対女のゲームは最初から決着がついていた。スタンリーの方が、女性の扱いには手馴れた男性であり、ブランチは対等の相手にはなりえない。ブランチは、自身の魅力は年齢的な容貌の衰えよりも、それを上回る魅力があると看做す。そしてそれは、真の男性ならそれを理解し、ブランチのその魅力にひびかず自負心が、スタンリーを挑発して彼が振り向くと思っている。それはしよせんブランチの一人よがりであり、スタンリーとの価値観は平行線をたどる。スタンリーにとっては、ただの婚期を逸したニンフォマニアで、盗み酒をする酔っ払いのブランチが自分の肉体を投げ出して誘惑している、と読み取ったスタンリーは、言葉の暴力から肉体の暴力へとエスカレートしてゆく。その行為は、一見してスタンリーがブランチをただ征服したかのように見える。しかしそれは、ブランチを完全に攻落させなければならないというスタンリーなりの思惑がそこ

にあった。ステラと誕生する子供を守ろうとするなら、ランチを追放することで十分なはずだ。また、性欲の発露と考えるならば、スタンリーにはもっと若くて澁刺とした女性を手に入れられるという自負心もある。それならば、ランチをもう二度と起き上がれないほどの精神的、肉体的苦痛を与えて打ちのめしたその要因は、次のように推察できる。スタンリーがこれまで積み重ねてきたもの、つまり軍人として武功をあげ、勝利の側に位置してきたこと、そしてセールスマンとしても企業内で優秀な成績をあげていたことなど、これまでの自分自身に敗北という二文字は存在しなかった。ステラという、貴族的階級の出身者も手中に収めることができたし、友人のなかでも一目おかれる存在となっている。そして、誕生する子供のためにも家庭を守り、一家の主としての威厳も保たねばならない。また、ステラやランチが円柱のあるお屋敷に君臨してきたように、いわばニューオーリアンズの小さな一角に君臨してきたのがスタンリーである。地域の雄としてのスタンリーにはランチを、立ち上がれないほど打ちのめさないことには、スタンリーが頂点に立つ勇者だという認知がえられない。またランチによってスタンリー夫婦の絆を侵される不安を拭い去るためもある。そういうもろもろの感情が結集した行為であった。自身のこれまで信じてきた価値観、信念の下に生きてきたスタンリーにとって、ランチを破壊することこそ自身の生を確立できると感じていたのであろう。それだけステラを愛しているということにもなる。また、ステラもスタンリーのいない生活は考えられないくらい、この二人には、どのような形であれ愛の絆がしっかりと根をはっている。この『欲望という名の電車』には、新旧文化の対立を描いているといわれる。すなわち旧い南部の農業主義を破壊し、新しい機械文明を作り上げてきたスタンリーに対し、いつまでも旧い文化にしがみついて、新しい機械文明になじまず、物質至上主義を嫌悪する南部社会の代表としてのランチ、それぞれを新旧とした。知的なもの、洗練された文化を求める繊細なランチと野獣性を発揮することで、戦場で生き延び、そして現実的なものごとの考え方で資本主義社会を生き抜いてきたスタンリー、この二人を通して、滅びゆく旧時代に生きるものと、たくましく新時代に生きるもののコントラストの絶妙さが、この作品をより一層秀逸なものにしている。

ウィリアムズが描くランチは、現代社会の非情と戦って、傷つき敗北した。女性に対して肉体を武器にしてきたスタンリーにとって、陵辱という行為は、彼の王座を示す必然的行為であるといえる。“We’ve had this date with each other from the beginning!”<sup>(19)</sup>とスタンリーに言わせたのは、ランチの内面の抑えがたいリビドーが、性の権化のようなスタンリーにはわかっていた。そして、それに屈してしまったランチは、高邁な精神が愛の伴わない肉体の欲望に敗北してしまったことになる。しかしながら、痛ましい事件の加害者としてのスタンリーは、刑罰はおろか、妻のステラからもなじられなかったことや、地域の人々からも、なんの事件もなかったように、あるいはランチがそこに存在しなかったように、以前の営みが再開することになる。それこそ、ランチという一人の人間を抹殺したことより、存在そのものが最

初から否定されていたことになる。しかし、ステラはもちろんのこと、少なくとも隣人のユーニスあるいはミッチにとっては、ブランチがこの場所に存在し、そして去ってゆく姿に憐憫の情を示す。ともあれ、ユーニスがステラに言う、“Life has got to go on.”<sup>(20)</sup> という台詞からも、人々の生活は継続してゆく、いや継続していかなければならない人間の苦悩が表現されている。

ウィリアムズは、ブランチに敗北を承知で戦わせる。それこそ、作者自身が作品の中で、描こうとした主題の一つである。すなわち、文明の進歩に伴って、現代社会が非人間化し、情緒や詩情などが枯渇している、そんな現代を憂ふウィリアムズの心情がそこにある。現実生きる人間の苦悩、挫折はウィリアムズにとっての叫びでもあり、それを鋭く観察し、それによって人間の真実を探求しようとした。

ブランチが他者と相容れない苦悩は、ウィリアムズの苦悩でもある。他者との精神的、肉体的触れ合いを求め続けた行為は、まさに「ブランチはわたしだ」と語ったウィリアムズの思いがそこにある。

## おわりに

人は一生のうち幾人の人と接するのだろうか。ブランチにとって、人間的関わりを持った人々、すなわち父母や妹、夫、義弟、結婚相手になろうとした男性、それらの人々だれもがブランチの苦悩を癒してくれることはなかった。その第一の要因は、ブランチが真のコミュニケーションを他者ととれなかったことにある。

ブランチは、自分で自分の精神の高邁さを認めてはいるが、他者が承認してくれない。他者に承認されないことには、彼女の高邁な精神は存在しない。そのため、自分に敬意を払ってくれる人を必死で捜す。しかし、その人はついに見つけられなかった。ブランチにすれば、自分をよく知り、親しくなれば、彼女が高邁な精神の持ち主であると必ず承認してくれると、確信している。しかし、それは見事に裏切られることになる。そして、「見ず知らずの他者」はブランチの過去を知らない。だから、ブランチは「見ず知らずの人」、つまり他者を求め続ける。彼女の身につけた優雅で、知的で、上品な振る舞いを承認されることが、彼女の生きてきた人生の証となるはずだった。その承認が重要になればなるほど、承認されないことが、いっそう不安になる。ブランチは他者を理解するための手段として、特に異性である他者には、性的関係を通して理解しようとした。しかし、ブランチは他者と肉体を触れあい、そこに他者がいるという確認をしても、内面の彼女は他者に触れていない。結局、肉体と精神は切り離されていることになる。他者からの承認を得られないブランチは、他者から自身が人間として価値があると承認されたという虚偽のストーリーを作る。そして、自己が承認した自分と、他者が承認しない自分の間で、精神に狂いが生じる。またブランチの場合、自分の価値観で他者を理解しようとする。しかし、同じ価値観の人間とは、それが容易になるが、価値観の異なる人間とコミ

コミュニケーション不足のまま、理解しあおうとすると、そこには必ず軋轢が生じることになる。それは、アメリカ南部の広大なプランテーションで生を受けたブランチが、それを宿命と受け止める不器用な生き方を責めることはできない。

最後の安らぎを覚えて、“Whoever you are - I have always depended on the kindness of strangers.”<sup>(21)</sup> というブランチの台詞が象徴するように、ブランチが真に庇護を求める人間は、「見ず知らずの人間」以外にいなかったということである。ブランチにとって最後の他者となる医者とは、真にコミュニケーションをとるべき他者でもないし、もはやその必要もない。ただやさしくブランチの腕をとって、淑女の尊厳を彼女に持たせてくれた他者となったのはせめてもの救いといえるだろう。

ブランチが虚偽ではなく、最後に真実を語ったことは、義弟スタンリーにレイプされたとステラに告げたことである。それは妹の保護も得られないと悟りながら、真実を語るブランチの敗北の中の威厳がそこにある。虚偽で塗り固めたブランチの人生の終幕は真実であったが、それはステラにとっても、ブランチにとっても苛酷な結末であった。

結局、このように考えてゆくとブランチはだれとも心の通いあう真実のコミュニケーションができなかったことになる。このことは、われわれが生きる現代社会へのアイロニーでもあり、痛烈な批判と受け止めなければならない。

ブランチが最後まで戦った失われた旧世代の精神の高邁さは、この世のどこにも見出せなかった。それこそ、ウィリアムズがブランチに負け戦だと知りながら凄絶に戦わせ、われわれにその意義を問うているのである。

この論文のテーマは、ブランチと南部について論述してきた。本論では、ブランチが接する人々とブランチとの軋轢を軸にして分析してきた。根底にあるブランチが南部を背負って生きてきたことによる要因は否めない。ブランチは、南部の古き良き時代の富や伝統に保護されて生きることしか術を知らない。そして、南部の貴族的社会の洗練された文化に誇りを持ち続けてきた。その南部の精神の幻想を破ることができない。そして、自分でそれを破ることができないばかりか、他者によってその幻想は破壊される。しかし、ブランチは確固たる信念をもって敗北を覚悟で戦う。だからこそ最後にブランチがポーカーをしているスタンリーや友人の男性の側を通るときに、ブランチは“Please don't get up. I'm only passing through.”<sup>(22)</sup> と言い、男たちは“The poker players stand awkwardly at the table.”<sup>(23)</sup> と傷心のミッチを除いて立ち上る。ブランチに男たちがとった行動は、彼女が淑女として最後を終えたということである。それは、狂気のなかにも南部を代表する淑女ブランチが描かれ、ウィリアムズが彼女に送るレクイエムとなって本作品の終焉を飾る。

文明社会の恩恵を受けているわれわれとしては、ともすればブランチに代表される文化を愛する優しい繊細な心情を置き去りにしがちである。われわれは、それを死守しようとするブランチに、共感を覚えないではいられない。というのも、現代では経済的な裕福さを追い求める

あまり、文化的な裕福さを二義的なことだと考えることのほうが多い。それどころか、文化的な貧しさに対して、関心が薄いのが実情である。

とはいえウィリアムズは、この作品のヒロインであるブランチをアメリカ南部の古い文化の代表として賞賛し、彼女が死守しようとした精神をただ美化しようとしたわけでない。彼は敗北者を凝視し、その深奥に潜む醜い真実も描写することを忘れなかった。それが、この作品に深みを与えている。このことが、この作品が世界各地で上演されてきた所以であろう。

〔注〕

- (1) "I am Blanche Dubois.", Felicia Hardison Londré, *Tennessee Williams, Literature and Life Series*, New York, F. Unger Pub. Co., 1979, p.21.
- (2) 以下の記述については、井出義光著『南部もう一つのアメリカ』（東京大学出版会、1978）を参考とした。
- (3) *A Streetcar Named Desire, The Theatre of Tennessee Williams, Vol. 1*, New York, New Directions, 1971, p.243.
- (4) *Ibid.*, p.243.
- (5) "A great big place with white columns.", *Ibid.*, p.249.
- (6) *Ibid.*, p.321.
- (7) *Ibid.*, p.319.
- (8) *Ibid.*, pp.312-313.
- (9) *Ibid.*, p.386.
- (10) *Ibid.*, p.245.
- (11) *Ibid.*, p.255.
- (12) *Ibid.*, p.321.
- (13) *Ibid.*, p.271.
- (14) *Ibid.*, p.376.
- (15) *Ibid.*, p.359.
- (16) *Ibid.*, p.396.
- (17) *Ibid.*, pp.280-281.
- (18) *Ibid.*, pp.264-265.
- (19) *Ibid.*, p.402.
- (20) *Ibid.*, p.406.
- (21) *Ibid.*, p.418.
- (22) *Ibid.*, p.413.
- (23) *Ibid.*

〔参考文献〕

- Blooms, Harold. ed. *Tennessee Williams's A Streetcar Named Desire*, Modern Critical Interpretations, New York, Chelsea House Publishers, 1988
- Boxill, Roger. *Tennessee Williams*, Macmillan Modern Dramatists, London, Macmillan Publishers Ltd., 1987
- Danahue, Francis, *The Dramatic World of Tennessee Williams*: New York, F. Unger Pub. Co., 1964.
- Lenea, Signi. *Tennessee Williams*, Twayne's United States Authors Series, 2<sup>nd</sup>.ed. Boston, Twayne Publishers, 1978

(よしなり れいこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：加藤 芳慶 教授)

2005年10月19日受理